

薄幸の小姓（その4）

トリスタン・レルミット

野池恵子訳

32.どのようにして薄幸の小姓は毒をもられたか。

私にとって幸福であり同時に不幸でもあったその日以来、主人はさまざまな策を講じて私をたえず自分のそばにおこうとしました。彼女は私に食卓の世話をさせようとして、もうその担当の侍臣にわざわざほかの用をいっつけはしませんでした。断固たる口調で、侍臣の役目を私が果たすよう命じたのです。美女からかくも手痛い仕打を受けた侍臣は、そのために私を殺して恨みを晴らそうと心に誓いました。ある晩のことです、私は錬金術師がくるはずだった商人の家の近辺であまりにも長い時間を過ごしてしまい、夕食の時刻に間に合わなくなってしまいました。そこで食事を自室にはこんでもらいましたが、何と驚いたことに、供されたサラダを少し飲み込むと、咽と舌にやけるようなひどい痛みを感じるではありませんか。唇はふくれあがり、それとともに体が熱で熱くなってきました。この即座の激しい症状を目の当たりにしたものはみな、私が毒を飲みこんだものと確信しました。毒とまではっきりと認めたくはなかった人々もすくなくとも、サラダの野菜の間に蜘蛛のようなものが入っていたと言っていました。それにしても手当てをしなければなりません。みなは私に生温い油を飲ませ、嘔吐させようとしてしました。しかし、家の医者かスプーンに何かわけのわからない解毒剤を入れて私に飲ませようとした時、私は錬金術師がくれた魔法の薬がまだ残っていたことを思い出しました。そうなるともうほかの解毒剤はのみたくありません。私は錬金術師の薬を3、4粒服用しました。するとむが早い奇跡のような効果が即座に現れて、毒はこの効き目の高い薬によって消えたのです。しかし、毒は消えても消耗感が激しく、また唇が少しふくれて黒ずんでいたため、私は部屋にこもらざるをえませんでした。そのような状態で主人の前に姿を現す決意などできたものではなかったのです。しかし主人のほうはその事件を知って、すぐに私に会いに来ました。主人は彼女のお気に入りの侍女と連れだって私の部屋のそばにある大テラスを散歩すると見せかけ、そこから私のところに忍び込んできたのです。彼女は私の不幸をなぐさめ、深く私に同情していると断言しました。それにたいして私は、まだ口がうまく動かず目で答えることしかできませんでした。彼女も視線を返してくれましたが、その目にはしばしば涙があふれました。彼女はこうして私のところを訪れたあと、誰の目にも明かな毒殺未遂事件の首謀者にたいし怒りを爆発させて、事件の解明を間違いなくまた手厳しくとり行わせようとしてしました。しかし彼女や私などよりも分別のあった彼女のお気に入りの侍女はその計画を諦めさせました。事件を解明しようとしても無駄だ、秘密にすべきことまであかるとみだすだけだ、と侍女は主人をさとしたのです。われわれにとって最良の策は、その犯罪を隠し、ことに噂が立派な母君の耳に届かないようにすることなのでした。私の美しい主人は、私の体が不調のあいだ、部屋からジャムをたくさん届けてきまし

た。また、主人自身に供された料理を侍女に命じて、侍女の手で私のところに運ばせました。さらに優しい愛情を示したくなった彼女は、ある晩、私を喜ばせようとしてたくさんの小さな宝石類と彼女の髪の毛で作った腕輪とを持って私を訪れたのです。腕輪の止め金にはすばらしく美しいエメラルドの薄板が使われていました。私はそれらを受け取りましたが、それは私に宝石を与えてくれる人の手を大切に思ったからで、豪華な宝石を高く評価したからではありませんでした。私は錬金術師にたいしあてにしていた巨額の財宝に思いをめぐらせていたので、それらがどれほど高価な細工をほどこされた品々であろうとほとんど重視していなかったのです。したがって虚栄心につかれて、また主人が気前良く与えてくれた贈物にまもなくお返しがふんだんにできることを期待しながら、あの奇跡の男が私に待つように命じた商人の家に、一日に2、3度は人を遣わさずにいられますでした。商人の家を見張るようになってからもう3週間以上もたつのに、男は約束したとおりの時期にロンドンにやってこないで、それがそろそろ苦痛になり始めていたのです。

33. 主人に伴って薄幸の小姓は出立する。その道中、どのようにして主人の従姉妹から手紙を受け取ったか。

主人の母君がロンドンに出てきていたのはある大きな裁判の判決を確認するためだけでしたので、用事がすべて片づく、彼女はいくつかある住まいの一つで、スコットランドとの国境あたりの小川の岸辺に建てられた見事な城に戻る決心をしました。ある晩、私の主人のお気に入りの侍女が私のところにやってきて、翌日に出立するので主人につききりでいなくてはならない、と告げた時には私は本当に驚きました。

この知らせを聞いて私はかなり動揺しました。主人からほんのわずかでも離れたなら死んでしまふさうでしたし、だからといって想像上の富が実際にわが手にはいる可能性のあるその土地を、さほど簡単には去れません。私をそこに残して欲しいと申し出る気力もなく、そのくせ主人とともに出発したらひどく気落ちするに違いありませんでした。しかし最後には強い方が勝ちました。私は主人とともに豪華四輪馬車に乗りこんだのです。あの錬金術師が到着したら私に知らせよう人に命じ、金も置いたうえでのことでした。私はまだあなたにお話ししてはいませんでしたね、私が病気のときに主人の従姉妹がどれほど熱心に、休みなく容態を尋ねてきたか、何度、彼女が小姓を私たちのもとに送ってきたかについては。その小姓に会うことは、当方で用心していたから一度もありませんでしたが、がそれよりも、次のようなことが起きたということだけ、お話しいたしましょう。私たちが町をでるやいなや一人の男が馬に乗って追いかけて来ました。その顔を見かけたことのある者は仲間には誰もいませんでした。飛脚は大声で、この一行にフランス人の若者がいるはずだ、その若者にフランスから届いたばかりの手紙の入った包みを渡したい、と述べたのです。私はそれを扉越しに聞き、包みが私あてであることを彼に合図して知らせ、同時にポケットから金貨を一枚取りだして渡し労をねぎらいました。飛脚が手紙を私に渡した時、四輪馬車が主人の命令で止まったので、彼はさらにこう言いました。それは重要な知らせなので、間違いなく渡すよう命じられた、またその手紙に返事の必要があるかもしれないので一行が食事をとる場所までつきそいたい、

と。私は飛脚の言葉を聞いて喜びのあまりひどく興奮しました。私は確信したのです、絶体にあの錬金術師がやってきたのだ、手紙はそれを知らせるものだ。私は今にも主人に、召使の馬を貸して欲しい、ロンドンまでその馬で一走りして来たい、戻るまで召使には私の座席に座らせておいて欲しい、と申してようとしていました。ところが私に心配事ができたことに気づいた主人は、彼女自身が私の苛立ちに耐えられなくなり、手紙の封を切るように私に命じました。私はすぐに彼女の命に従い、手紙を広げました。そして内容をざっと読んで、顔から血の気がひいたのです。主人はそれに気づき、ひどく顔色が変わったが悪い知らせなのか、いったい何が起きたのか、と私にたずねました。私はむしろ若者に特有の羞恥心を顔に表して、体の具合が少し悪かった母親からの手紙だと答えました。私は手紙をすぐさま折りたたみ握りしめたので、あの美女はどんな書体で書かれているか、私がどのような身分にされているか知りたいので、手紙が見たいと言いだしたのです。私は手紙を快く見せましたが、彼女は文面を見た瞬間、その内容と差出人が、教えられたものと違うのではないかと疑いました。しかし彼女はそのまま手紙を私に返し、湧いた疑惑を巧妙に隠したのです。私の秘密を見破りその不実をさらに明かにしたいと思った彼女は、時をおいてかならず、その手紙に関係したことをたずねてきました。手紙の書かれた日付はいつなのか、私の母はどこの具合が悪いか、人に話しても構わないことでそのほかにどんな知らせを私の母が書き送ってきたか、などです。私はそれらの質問のすべてに返答をしましたが、いずれにしろ困惑して取り乱してしまい、そのたびにさらに赤面することとなりました。主人は、それらの質問があまりにもひどい苦痛を私に引き起こしたので、私に哀れみを覚えました。手紙について話すことは私を拷問にかけるとの悟ったのです。ついに私たちは昼食が用意されていた城に到着しました。私はみなが食卓につくまでの時間を利用して返事を書き、私についてきた使者に持たせて送り返そうと考えて、執事から文箱と便箋をもらいました。そして離れた寝室でこっそりと返事を書いていたところ、主人が不意を襲って現れたのです。机の上に広げられた例の手紙をしまう間も与えず彼女は手紙が次のような内容だということを知ってしまいました。

私はあなたに対し十分に愛情をお示しましたから、いくらかの感謝のしるしをあなたには表していただけるものと思っておりました。それなのに私はもう一週間もあなたの消息が届くのを待ちこがれ、どうなさっているか知ることができません。あなたは私のどの召使の目からも逃れておいでですね。私は彼らと同じようにあなたの姿を最初からお見かけしないほうがよかったですでしょうか。そうすれば、私を欺くことになる希望など持たずにすみませんでした。もし私への音信不通があなたの意志ならば、このまま何の便りもおだしにならないでください。もし、他の誰かから厳しくそう強いられているのならば、あなたの消息を私に知らせる手段を探してください。あるいは、私に会いにくる方法を見つけてくださいませ、私は恋をしているのですから。

あなたにお仕える者、あなたの最良の友より

私の主人はわずかに動揺しながらこの手紙を読み、文面にまず彼女の従姉妹の恋心を読み取りま

した。しかし、従姉妹との仲が親密である証拠がそこにはまったくなかったもので、私にとって主人の気持ちをなだめるのはさほど難しいことではありませんでした。彼女が不満に思ったのは、私がこの件を秘密にしておいたこと、そればかりかその隠し立てを嘘で粉飾したこと、それだけでした。彼女の非難に対して私は、どんな女性に対しても持たなければならない尊敬の念と、紳士が婦人に対して保持する習慣のあの賢明で侵すべからざる秘密厳守の義務とを持ち出して対抗しました。その結果、彼女は私の弁解を受け入れましたが、罰として、従姉妹に次のようなことを書くよう私に命じました。

主人の従姉妹への薄幸の小姓の返信

あなた様がたぐいまれなる美しさと美德の持主でいらっしゃるにもかかわらず、またあなた様の私に対するご厚情が絶大なものであるにもかかわらず、私はおそれながらこう懇願いたします。私があなた様にお示し申し上げる感謝の念がわずかなものであっても驚きくださいますなど。これは主人が、あなた様にお返事いたします手だてもその時間もすべてを私からとりあげてしまったからです。ですから、あなた様が私にご好意をお寄せくださいますも無駄なことでございます。私はあなた様に次のようにお書きする時間さえほとんどみつけないのです、

あなた様のきわめて従順なるしもべより、と。

こうして手紙は書きあがりましたが、意地悪くも私の主人は、私がこの手紙を彼女の目の前でいそいで書くように望みました。それは私が書くのに手間取らないようにさせるためでしたが、また同時に、私とその手紙に無頓着なのを見て彼女は満足を与えなかったからでもありました。

34 薄幸の小姓は主人から贈物を受ける、二人がともに旅をする道中で。

われわれの旅は何事もなく続けられました。私は『アストレ』¹⁰ですでに読んだところすべてを、道すがら主人に語ることにしました。それがいま脚光を浴びているもっとも巧緻にして楽しい小説の一つであり、有名なその著者がこれですばらしい評判をとったことは、誰もが知っていました。私は主人や彼女のお気に入りの侍女の耳を疲れさせないように、毎日5時間ないし6時間をこれにあてました。主人の母君やその腹心の女性の一人は私の話を聞くうちに魔法にかかったように寝入ってしまったが、これは私たちがかわしあう流し目や耳許でささやきあうちょっとした言葉が彼女たちに気づかれないように私がとりはかったことでした。しかし、私に毒を盛ったあの侍臣は好奇心から、私の座っていた馬車の扉の帳の前方にしばしば馬を駆り立てて出てきては、私が名誉ある立場にいて美しい主人と良い仲なのを認め、激しく怒りに燃えました。侍臣は私の主人を人知れず熱愛していたのに、まったく寵愛されなかったのです。私は、彼がしばしば天をみあげ恐ろしいしかめ面をする姿をみかけました。それが私への呪いなのだと思えることはできましたが、それでも私は笑わずにはられません。ある晩我々が、当家の親類の所有する城に着きそこに投宿したときのことです、ここに2、3日逗留することになっていましたが、私の世話係を命じられていたア

イルランド人の少年が、こう私に告げにきたのです。私の寝室にトランクが一つ届いた、私の所有品ではないのでそれを受け取っていいかどうか聞きたい、と。私はそれが何だかわからないでいると、われわれの話を聞いた主人のお気に入りの侍女が笑いながら私に言いました、奇妙に思う必要はない、それは彼女の親友の衣類なのだから、と。私は彼女がこう言明してくれたことに対して丁重にお礼の言葉を述べ、すぐに召使にトランクを受け取るように命じました。しかし、私が自分の寝室に引きとると、おなじ侍女がそのトランクの鍵を届けてよこし、寝室にあるものはすべて私のものであると伝言してきました。それを聞いて私はひどく驚きましたが、まったく覚えのないそれらの衣類がどんなものか見てみたくなりました。すぐに私はその大箱をあけてみると、なかにはたいへん上等の二着の礼服がきちんとたたまれて色鮮やかな装身具類とともに、はいていたのです。私はさらにいくつかの箱を開いてみましたが、そのどれもに上等な下着がきちんとたたまれてたくさん入っていました。また、つややかなうろしと金で覆われた四角い箱には、それは中国でつくられた箱でしたが、香油や匂い粉が詰められたすばらしい瓶が何本も入っていました。これらの品々のなかに、ダイヤモンドで飾られた肖像画の箱がみつかりました。肖像画の人物は私が熱愛する女神でした。箱の上にはうすい小さな紙が四つに折られて置かれ、次のような文が書かれていました。

もしあなたがこの贈物に物質的な価値だけをお求めになるなら、これはあなたにとってとるにたりないものとなりましょう。ですがもしあなたがこれを受け取られて、その送り主の愛情を心におとめくださるなら、蔑ろにはなさらないでしょう。これらの品々をどうか私のために身におつけください、私は心に、あなたの姿をいつも刻みつけておきたい思います。

手紙には署名がありませんでした。そのかわりに、私もよく知っている暗号が記されていました。その暗号は、私の目の前で主人が幾度もあちこちの窓ガラスに、ダイヤモンドの先端で彫りつけたものでした。私は長い間この手紙や肖像画に口づけをしました。私の恋する人がとても心細やかで情愛にあふれているのを強く感じ感謝の念で心が満たされました。しかしながら刺のないバラが存在しないように、私はある種の苦悩を感じることにこの喜びを味わうことができなかつたのです。この時ほどあの錬金術師の到着が遅れていることを不安に思ったことはありません。私は彼からすばらしい秘伝を伝授してもらい、そのあとで私の主人の数々の贈物に感謝する手段を得ようと思って、また彼女のお気に入りの侍女にもふんだんに贈物をしたいと思って、彼の到着を待ちこがれていたのです。

35 薄幸の小姓が愛の証をほかに主人から受け取った快い夜について。

私は主人が姿を現すやいなや彼女に近づき、その贈物に対して非常に丁重に感謝の念を表明しようとした。しかし私がきりだそうとすると彼女はすぐに私の口をふさぎました。彼女は自身の慎み深さが私に台無しにされるのをおそれたからか、あるいはそれで私が狼狽してはいけなかつたのでしょう。私は彼女の広量なつつましさに高貴な生まれの者が持つ思いやりを認めて感嘆し

ました。そしてそれをきっかけに施しについて考察し、いくばくかの施しをする時に自分のことや自分の虚栄心しか考えにいれない貴族たち、善行を施すにもしばしば受け取る人間に中途半端な親切かしない貴族たち、これらの貴族たちは決してほめられた存在ではないと考えました。彼らは何度もうるさく催促されてようやく、パンのかけらに石を混ぜて差し出すのです。彼らは虚栄心から物を施すので、相手を尊大な言動で打ちのめすことができなくなると、激しく怒るのでしょう。

私の主人はほとんどまる1日というもの、私が小声で話しかけようとしても耳を貸そうとしませんでした。そのようなことを言ってはならない、ひどく困惑するだけだ、と彼女はいつも私に述べるのでした。最終的に私は彼女の肖像画について話したいと合図したところ、彼女はついに折れました。それはすばらしいできの小肖像画で、画家が自身の技法の限りをつくして、実物の彼女の美しさがその絵と同じであることをわからせるために描いたものでした。私たちはこの肖像画について大いに意見を戦わせましたが、戦いはもっぱら私の愛と彼女の慎ましきの戦いに終始しました。結局、彼女は慎ましく礼儀正しかったために私に屈し、勝ちを私の熱情に譲りました。彼女はもうそれ以上私を引き立てられなくなったので、手を私に差し出して口づけをするよう促し、それで私の口をふさいで私に黙らせようとしてしました。

一方、私を秘かに憎んでいた侍臣を除き家の全員が、その日私の着ていた新調の服を見に集まって来ました。そして私が立派な身なりをしているのを見て、私の仕立屋の名前は何か、それはイギリスのかフランスのか、装身具はいくらぐらいしたかなど、さまざまなことをたずねるのでした。私はそれらの問いのどれにもほとんど答えることができませんでした。私の主人も彼女のお気に入りの侍女も、彼らといっしょになって私に何事かを言っは、まわりの人たちが知っている以上のことは何も知らないと思わせようとするのでした、しかし、彼女たちは通りがかりにそれについては一言私に言っただけでした。

豪勢なもてなしを受けてこの立派な城を出発する日の前夜、私の主人は近隣の貴族たち全員から挨拶の言葉を述べられて疲労し、かなり早い時間に部屋に下がりました。もしかしたら彼女は甘くささやきかける何人かの領主たちの言葉に、思いのほか長いあいだ耳を傾けてしまい、気がとがめたのかもしれませんが。彼女はベッドに入るとすぐにお気に入りの侍女を私のもとに遣わせて私を呼び寄せました。侍女は、主人の母上が私の腕に寄りかかり私とともにいたにもかかわらず大声で、彼女の主人が眠れないでいる、何かお話をしてさしあげて眠らせてあげて欲しいと私に言いました。娘の健康を何よりも大切に思う優しい母君は何も言わずにすぐに私にその許しを与えました。そして私は悦楽の頂点へと手を引かれて行ったのです。口に出して言わないほうがいっそう強く感じられることについては、ここであなたに申し上げるのをやめましょう。それにそれらのことを口に出して言えるということは、私がそれらを強く感じとれる人間ではないということなのですから。私は7時間から8時間の間、ベッドの置かれた閨房で片膝をついて、誠実な愛の証として人が与えることができる気高い寵愛のすべてを受けとったのです。忠実に愛することをお互いに何度も何度も誓いあいました。そして、不安から何度も非難しい、それをつぎには愛の力で解消するのです。不安のすべてが、与えては受ける堅固な愛の誓いによっておさまったのです。主人から侵されること

のない愛の確かな証拠を数多く受けとって、私はようやく彼女のもとを退きました。私は幾度となく別れの言葉を口にしましたが、それで私たちの会話は終わりませんでした。彼女がまだ言いたらないことを思いだして私を何度も引きとめたからです。もし彼女のお気に入りの侍女が睡魔におそわれ死にそうになって私たちに、夜がひじょうにふけたと告げにこなかったら、私たちはともに夜明けを迎えたことでしょう。

36 薄幸の小姓は主人の家に滞在する。侍女がいかに巧妙だったか。

私はこの幸せな夜に続いてほかに何度も心地よい夜を過ごしました。あまりにも幸福であるために感じる不安、錬金術師の近況を知りたいというあせりから生じる不安、というのもあの錬金術師は私の愛の計画の実現に是非とも必要に思われたからですが、そういった不安を除けば私にはほかにどんな心配のたねもありませんでした。私たちは3ヶ月ないし4ヶ月のあいだ逗留することになっていた彼らの美しい住まいに到着すると、町に滞在した時より自由に会ったり語り合ったりすることができるようになりました。私の主人は母君に太りすぎるのがおそろしいと常々述べていて、そのおそれがあるからと偽って不都合な事態に陥らないよう午前中から散歩に出かけるのを日課としていました。行き先は小川の岸への段丘に広がる大きな果樹園で、私は彼女のこの運動のお供をするためにいつも呼び出されました。彼女の歩くのを助け、気晴らしの手伝いをするためでした。彼女の侍女は、彼女が私に抱いている気持ちを非常によく知っていました。それで私は躊躇することなく侍女に打ち明け話として、私は生まれがたいへんよいこと、王子たちのあいだで育ったこと、私にはかなりの額の財産があり5、6ヶ月のうちに一万エキュ^①を彼女に与えることができること、それで私に不都合なことは何も起きないし、特に奮発して与えるわけでもないこと、などをあかしていました。それに自分で言ったことがあまりにも真実なことに思えて、侍女に対するそのうけあいかたまで自信に満ちたものになりました。

彼女は、こうして間違っただイメージを私にたいして持ったために、またそれは私自身の脳裏にすでにそう刻み込まれていたものでしたが、大変気軽に私に仕えてくれました。彼女が私たちのもとに来るのを遠慮し、邪魔にならないようにしたのはこういった事情が一部に働いたからでした。私たち二人だけのほうがずっとくつろげるだろう、と彼女は考えたのです。また私たちはこの大きな果樹園の奥まったところにある、密生した森の中によく迷いこんでしまいましたが、このそつのない娘は時々どこかの太木に目を向けて、かなり長い間その美しさを鑑賞していました。彼女は私に、何らかの愛のしるしを主人からもらうための大胆さとその時間を与えようとしたのです。

またある時、私たちが小さな迷路の中央に作られたまったく人気のない泉のそばの、草の上に座っていると、その侍女は水の流れる音を聞きながら寝入ったふりをしました。目が覚めきっている二人にとって彼女が邪魔な存在にならないようにしたのです。また私の主人はしばしば奉仕者遊びをすることがありました。草の茎を用いてくじを引くのです、侍女はいつも最愛の人が私になるように仕組みました。すると私の主人は顔を赤らめて、居並ぶ男たちのなかから私を勧めるのは不適當だというような態度を示します、それにたいして機知に富んだ腹心の侍女は、ただもの柔ら

かに申し開きをするだけでした。たしかに私は生まれの知れない外国人だからそれにも一理はあるが、人から高く評価されている領主たちに、私は匹敵する存在なのではないかと思われる、と侍女は言ったのです。そのようなわけで私の愛は航海しながら風を受け、また潮の満干を体験させられはしたものの、すでにその港は見えていました。ところがこの時、逆風が吹いて私は道を見失い、暗礁に乗り上げてしまいました。あやうく座礁するところでした。

37. 薄幸の小姓の、当家の侍臣への対処のしかた

魅惑的なその館に私たちが落ち着いてすでに1週間がたちました。その間ロンドンから何の便りもなく、覚めている時の、また夢を見ているときの甘美さを乱すものは、あの錬金術師に再会したいという執拗な欲望以外にありませんでした。薔薇十字団⁹という異名をとったあれらの夢想家たちは、錬金術師になることをとりわけ自慢にしましたが、私にはあの男が実際彼らのいう錬金術師のように思えてなりませんでした。ある朝、私の主人のお気に入りの侍女が私に会いにきました。私が自室で着替えをしていたからですが、彼女は何か私の物入れの一つにしまってあるものを見たいというふりをしながら、その中にスペイン皮でできた財布を置いていきました。財布にはジャコビアン金貨¹⁰が百枚入っていて、侍女が主人の命令通りのやりかたで私のところに持ってきたものでした。私にはこの金の一部を、即刻、間違いなくあの男の到着を知るために用いるのは、時宜にかなったことだと思えました。そこで私はこの仕事に向きそうな使者を探しました。そしてまもなく頭のかなりよい、非常に忠実な使者が一人みつかったのです。その男は所帯持ちでしたが、それまでの生涯を旅に暮らしていたので、20ポンドが支払われた上、道中の分とロンドンに滞在する分が別に貰えるとわかると、この仕事で妻や子供たちを置いて旅立つのに何の心痛もなくなりました。彼は錬金術師が泊まることになっていた商人の家のそばに宿をとり、使用人の一人と懇意になるなどして近間なのをうまく利用し、その異国人の到着をいち早く知るようにする、と私に約束してくれました。彼がロンドンで待機するのは1週間でしたが、私はそのあと同地にまた別の使者をやって、くだんの男の確かな近況が得られなければ2週間まで待つよう指示しました。

私は錬金術師に大きな期待を寄せたことから、ひどくうぬぼれるようになり、もはや自分自身がわからなくなってしまいました。大貴族になるんだ、だからもう薄幸の小姓として生きなくてもいいのだ、とせっかちに思い込んでしまいました。私は普段よりずっと時間をかけて身繕いをするようになり、私にはまったく似合ってもいない優雅さを、ばかばかしくも追及したのです。帽子のまわりには羽飾りをむやみにつけました。まるでつば広の婦人用の帽子のカブリーヌを被っているかのようにでしたが。また、どこかの元老院議員になったつもりで重々しくいかめしい足取りで歩きました。しばしば片手から手袋をはずし、頭髮に手をやるような仕草をみせましたが、それは手の美しさを見せるため、主人から贈られた立派なダイヤモンドをひけらかすためだけでした。私は愚かにもそこまでうぬぼれしまったので、たとえ私が率直で偏見にとらわれない気質の持主であっても、家の者にとっては耐え難い存在になってしまいました。徒労に終るとわかっているから私を喜ばせようなどとする召使は、誰一人としていなくなりました。私は私のことをいくらかの礼儀をもって

取り扱ってくれる人にだけ、機会が訪れると熱意を持って尽くしたのです。が、性格が良いということは、悪しき性格の者たちの間にあっては、どれだけ利点が多いことかあなたにもこれからわかりになりましょう。人から愛してもらうための術とは無用の長物ではございません。

ある朝、私の主人がまだ眠っている時、そして彼女の腹心の侍女がまだ自室から出てこない時、私は夢想にふけりながら城のかたわらにある牧草地まで散歩をしに行きました。たまたまそこで、家の奉公人たちが嫉妬深い侍臣とポーム⁶⁾の試合をしていました。私には彼らの試合は真剣なものではないように思えました。が、私が気にもめずにやった行為を、侍臣は犯罪的だと思ったのです。ほかのことを考えて深い物思いに沈んでいた私は、飛んできたボールを足で蹴ってしまい、そのために侍臣は1点を失ったからでした。彼は怒りで真っ青になって私のところにきて、狂ったような目で私をにらみつけ、ひどく文句を言いました。私には彼の言葉がほとんど理解できませんでした。私は侍臣の非難に対してこう言いました、私は彼に害を与えようと思っていないし、だからといって彼に仕えようとも思っていない、仕える理由より、むしろ害をなす理由のほうががあるが、と。そう言って私は、彼に私を呪わせるまま不満を吐かせるままにしてその場を去りました。いやな気分がすでに去った私は、ポームの競技者たちからかなり離れ、柳の植え込みの後ろあたりを散策しながらそれまでの夢想到に再び身を委ねました。その時のことです、一人の男がありったけの声を張り上げて私を呼んでいるのが聞こえたのは。ふりかえってその男を見ると、私の主人のところの若い将校であることがわかりました。将校は、私を殺すための勝負が企てられたことを私に告げに来たのです。私に仕えていたアイルランド人もすぐに私のもとにやってきて同じことを告げ、私の身に何か不幸が起きてはならないので、城に戻るよう私をせきたてます。しかし若者の血は燃えたぎっているものです。そして若者には恐れよりも希望のほうが向いている。私は退くことは望みませんでした。退けば侍臣に優位にたたれるような気がしたからです。もっとも私には侍臣が一番強いように思えましたが。そこで私は固い決意を固めたように見せかけました。私に逃げるようすすめた二人の目にはそれが非常に確固たるものに見えたので、彼らも私とともに死ぬ覚悟を同時に決めました。彼らとしても私が殺されるのを見るよりは、そのほうがよかったです。そうこうするうち侍臣は、彼の一味の四人の召使とともにそこに現れて、彼らに自国語で『フランス人を叩きのめせ』と叫びながら手に剣を持って私のほうに向かってきました。私の味方をしようとしていた二人の若者は、私がかかなり大胆に侍臣に向かっていくのを見て、召使のほうに大きな音をたてながら応戦しました。私には剣の素質と業が欠けていなかったのも、またこの場をうまくおさめ、私に対して以前にみな抱いていた評価をうまく取り戻したいという何かわからない欲望に心が膨らむ思いがして、敵に迫りました。侍臣が、私にたいして優位に立とうとして卑怯な目論見を企てたおかげで、私の高慢だという印象はすこしすまるだろう、侍臣は、援助をあてにした仲間たちがそばにいないのを見て、私の目前から逃亡した、と言えればいい…。侍臣にとって不幸だったのは、彼がいつも川岸の方に後退していったことでした。われわれは川のすぐ近くまでできていたので、私が彼を思いきり強く押すと川に頭から落ちてしまいました。侍臣が転落したので、私は他の者たちの方を振り返って見ました。四人とも蹴りあいをしていましたが、戦ってはいても、ひどく痛めつけられるのはあま

り好まないような様子でした。彼らの剣の先端はほとんど触れ合っていなかったのです。彼らは絶えず言葉を交わしあい、まるで口論だけで充分だという様子でした。侍臣の四人の取り巻きは、私が一人で戻って来るのを見ると、興奮がさめてしまいました。私は味方のアイルランド人を呼んでその悪漢たちに言うよう命じました、彼らの雇い主をすぐに助けないと命に危険が及ぶだろ、川に落ちたまま放りおかれているのだと。四人はその知らせを聞くと全員で逃げ出し、侍臣を助けるために彼が落ちたところに走って行きました。そして私は、侍臣の攻撃を左手でかわした時に少々怪我をしたので、その指の手当てをしてもらいに城に登って行きました。牧草地で剣が抜かれたこと、そこに私も加わっていたことはすでに城全体に知れ渡っていました。誰かが窓から私たちの姿を見つけたので、私が中庭に入った時には、召使の大半が様子を見にそこにかけつけていました。その人混みの中から主人のお気に入りの侍女も騒動を鎮めようとして、ナイトキャップをつけたまま二人の侍女とともに出てきました。主人のお気に入り、私が片手に傷を負っただけなのに気づいて動揺が少しおさまり、私に主人の住まいの控えの間に来てくれるよう言いました。荒れ狂った男たちの興奮がさめるまで私を安全な場所に置くためです。彼女はよい軟膏があるので、それを手の傷口に塗らなければならない、と私に言い訳をしていました。私がその甘美な避難場所につくとすぐに、事件を知らせられていた主人が化粧着のまま出てきました。私に会って事の顛末を聞くためでした。私は、それを手短かに語りました。彼女には侍臣の行動が間違っていると思え、私の行動がきわめて雄々しいものに思えました。彼女は特に私のことを思って味わされた恐怖感がどんなであったか話しました。それらは私にはあまり心地よくないことでしたが、またいかに私の救出が彼女には重要だったかについても述べるのでした。そののち彼女は私の味方してくれた将校を自室に呼び寄せて、快く20枚のジャコビアン金貨を彼に贈り、お誉めの言葉をそれにそえました。彼女の言葉は金貨よりも彼をなおさらありがたがらせたにちがいありません。あのアイルランド人までがまた別の贈物を主人の側から贈られ、その忠実さに褒美が与えられました。われわれはこういったことを、秘密にしておこうといくらか努力はしたのですが、結局、家じゅうのものに知れわたってしまいました。そのあと30分たってから、侍臣についての報告が届き、私の主人は次のようなことを知ることとなったのです。彼はまさかさまに川に転落したあと、剣が流されるのをそのまま捨ておき対岸まで泳いで行きました。侍臣を船で助けに行き対岸から連れ戻した者たちが観察したところによると、彼の傷は顔に剣の一撃を受けた時に負ったものだけでしたが、自らの卑劣なふるまいに困惑するあまり茫然としていてほとんど口がきけない状態だったということでした。邪悪な行為は、実行に移されるや嫌悪の情を誘います、腐ったぶどう酒を飲んだあとの後味の悪さに似ていますね。まだそれほど罪を重ねず冷酷になりきっていない人々にとっては、犯した過ちから味わされる責め苦のうちでも自身の悔恨の情ほど激しいものはないでしょう。

私の主人は着替えをすませると私に手を預けて母君の部屋まで降りて行きました。そして私が彼女にとってまったく欠かすことのできない人物であると母君に述べたのち、彼女たち以外に頼みとする者を持たない異国の若者にたいして、彼女の侍臣が悪意に満ちた羨望の念を抱いたことを多分に誇張して語りました。さらに、若者は美点が多すぎるということだけが原因で、つまり彼女たち

がみなを平等に寵愛しているなかで彼が穏当に得た地位だけが原因で、そこまで恨まれたのだと続けました。心の優しい夫人はその話を聞きながらすぐに娘の考えに同意してしまいました。ことにかくも誇り高く生来正直に思える国の民が、一緒に暮らしている異国の人に恥ずべき弱い者いじめをしたことが、母君の目には悪いことと映りました。母君は食卓につくと侍臣とその仲間たちを呼び寄せて家の者たち全員がいるなかで、今度の一件について彼らを叱責しました。侍臣が母君の前で弁解をしながら、このいさかいで悪いのは私だと述べ、また主人にも、これについて何か反論しようとしたので、母君は彼に口をつぐませ、蔑むような目つきで彼を眺めながらこう言いました。『泳ぎを知っていてずいぶん役にたちましたね』。この言葉は私が彼に与えた傷よりももっと危険な痛手を彼に負わせることになりました。彼は私を決して許さなかったのです。

38. 薄幸の小姓の新たな喜び、そして彼に与えられた思慮深い助言

太陽が獅子宮に入って酷暑の時期になり、焼けつくような暑さが襲来した時のことです。この季節に涼気を愛好するのは誰にとっても自然なことですが、貴族の女性で虚弱体質であれば、それを念入りに求めるのは当たり前のことでした。そういった女性の一人だった私の主人は、何をしても母君に反対されたことがなかったので、その時期にも夜を心地よく過ごそうなどという突飛なことを考えつきました。彼女の庭にはかなり広々とした洞窟があったので、そこに住まいを作ることにしたのです。彼女はここに立派な寝台を置き、金で飾られた薄布にミルテと薔薇の花飾りがある彼女の頭文字をつけて、それを上からたらし寝台のまわりを快適で軽やかな雰囲気仕あげました。さらに残りの調度品も運び入れましたが、タピスリーだけは除かれました。貝で何人かの人物たちをかたどった洞窟の仕切り壁には、これは相応しくなかったからですし、それにいつもこの仕切り壁から水が、大理石の大きな貝殻の中に流れ落ちていたからです。

あの美女はこの魅力あふれる場所に身を落ち着けて、夜と昼の大半を心地よく過ごしました。お気に入りの侍女のほかにあと二人の侍女が、洞窟の窪みの人目に触れない場所にしつらえた専用の大きな寝台で寝起きしました。私はこの庭園の門番の役を言いつけられ、誰も中に入れないう命じられましたが、しかしそのことで私は、侍臣および彼と意気投合した人々の、羨望と憎悪の念をますますあおってしまいました。私の主人はこのすばらしい場所におもしろい本をたくさん持ちこみ、寝台のまわりの吊棚に並べましたが、それは私と話しをするための口実になっただけで、ほかにはほとんど役にたちませんでした。口実になったのは、母君が時折この涼しい場所に娘を訪ねて、物語のどこかすてきなところを娘のために読んでやり気晴らしをさせるよう私に命じたからでした。

しかしそういうことはめったになく、毎日、主人が姿を現すとすぐに、そして彼女が眠くなるまで、私たちは愛について話しあい、また、彼女が考えついたりあるいは私が考えついたりちょっとした遊びを次から次にして楽しみました。彼女はたいがい二人の侍女に用事を与えて城まで行かせ、お気に入りの侍女の方はほとんどどこにも行かせませんでした。時折この侍女も洞窟の外に出ることがありましたが、それは日当たりがよりよい入り口で裁縫をするためでした。そういう時、私の主人は時々いたずらをして、透かし模様に入った鉄の扉を押して洞窟を内側から閉ざしてしまっても

のです。そして同時に蛇口をまわして入り口一帯に水で花壇を作ってしまいました。そのため主人のお気に入りには洞窟に戻ることができなくなり、この小夕立が終るまで庭園のなかに逃げ込まざるをえなくなりました。彼女は、そういった他愛ない計略に気づいていましたが、きわめてそつがなく主人に不快な思いをさせることを何よりも恐れる女性だったので、知らないふりをしていました。貴族は、自分たちの秘密にあまりにも深く立ち入られると困る時、ほとんど場合、そばでかいがいしく世話をされるのをいやがります。そういう時は間抜けを装って気づかないふりをするのが、時には非常にうまいやり方なのです。しかし彼女はひとたび洞窟に戻り、私の主人が顔に手をのせてベッドに横たわって、眠りに落ちた様子をしているのを見ると、疑いを抱きます、何かしらの動揺を隠すためにそうやってごまかしているのではないか、顔に動揺が現れているのではないか、と。彼女は私たちについて何かを懸念していましたが、それが何であるかは私にも話さず、通りすがりに私の耳もとで『アリストン、分別を持ってね』、とただ言うだけでした。彼女は言葉に重みを持たせて私にそう述べたのですが、私は、何かに躊躇するような性格ではありませんでしたし、そのような年齢でもありませんでした。私は自分の欲望が与える助言に従いたかったのです。その結果きわめて重大な間違いに陥り、心地よいものはすべて許されると思い込んでしまいました。

39.薄幸の小姓の主人の惜しみない愛

私は、どんな偉大な専制君主がその至高の権威をもってしても強いることができないような隷属状態にありましたが、それでも今お話ししましたように、一層幸福に生活していました。一日に12時間も、14時間も、世界の美女中の美女の一人を、人を陶然とさせる住まいの中で眺めていたのですから。私はこの世で自分よりずっと愛すべき人物だと思った女性から、深く愛されていたのです。私はこの柔弱な逸楽が長続きすればよいという以外の欲望はほとんど持ちませんでした。時折この怠惰な眠りから覚めることもありましたが、それはあの錬金術師と再び肩を並べられるだろうか、という身を刺すような激しい不安感に襲われた時でした。愛からであったにしろ、虚栄心からであったにしろ、私が主人にしていた約束の、彼は確固たる保証であり間違いのない保証人だったのです。私にははっきりわかっていました、もしあの男が現れなければ私は彼女からいむべき詐欺者と見なされてしまうことが。恋人同志はどんな隠しだてもしません。心を開いた時と同じ情熱に燃えて、二人は言葉をかかわすものだからです。私は、私のアルテフィウスがロンドンに私を迎えに来てくれることをずっと望んでいました。彼は別れ際に固く誓ってそう約束してくれたからです。そして私はこれをあてにして、彼女に真珠や、あらゆる種類の黄金製の道具をいくつもの樽につめて贈る約束をしたのです。ある日彼女がこの秘密をさらに詳しく知りたがったので、私はより注目に値する人物になりたいとこう言ってしまいました、小さな奇跡を数多くなすその卓越した人物は、老齡の家庭教師で私の家の奉公人だが、私のことを非常に可愛がってくれている、必ず近いうちに私に会いに来て私が豪華な装いをするために必要なものを私に持たせてくれるのだ、と。

さらに、彼は小さな箱に液体や粉末が入った瓶をいっぱいにつめて私にかならずもってきてくれるだろう、それらの瓶は非常に貴重なものなのでこの島全体をひきかえにしても誰にも渡したくない

い、と私は言い添えました。その中でもとりわけ、滑石油の効能について彼女に述べたところ、彼女はこれをひどく待ちわびるようになり、それを手にいれるためならその美しい人は、身を任すこともじさないように見えました。主人はある日の昼食後に、母君の住まいからお気に入りの侍女と戻ってくる途中、庭園の木によりかかり深いもの想いにふけていた私の目の前に、不意に姿を現わしました。彼女は私をもの想いからそっと引き戻し、私のメランコリックな気質について意見を2、3言わずにはいませんでした。侍女がそれから何時間かのあいだ洞窟の入り口で刺繍をしていたので、主人はゆっくりくつろぎ、私にどうしてさきほど陰鬱な気分が陥っていたのかたずねました。私は何も隠さずに、私の家庭教師の身に何か起こったのではないかと危惧していた、彼がロンドンに私を迎えにくるのがこれほど遅れるはずがないからだ、と述べました。そしてさらに加えて、何か不幸が起きてその人が本当に死んだのなら、たとえ巨額の富を受け取ろうと私の悲しみは癒されないだろう、と言いました。この高貴な娘はそれにたいして、世の中の諸事のはかなさ、人間の命の保証のなさが私には大変よくわかっている、と答えました。そしてもし家庭教師が失踪したなら彼女も私の悲嘆を分かちあいたい、だがこの不幸が彼女にとってつらいのはただ私のことを考えるからで、彼女の損得のためではない、と述べました。さらに彼女はかなり高貴な身分に生まれついている、父方から譲り受けた財産のおかげで、身分にふさわしい生活を生涯にわたって保つことができる、彼女は財産目当てで私を愛したのではないから、私が無一文であっても彼女の気持ちに変わることはない。それどころか彼女は、不幸な目にあった私に、彼女の無私無欲の愛の率直さ、純粋さがよりよくわかってもらえて満足することだろう、心を捧げた上、財産を分かちあう理由までできるのだから、と述べました。また、私の貴重な精油がなくなって彼女が一番残念に思いそうなのは、彼女の膚を美しくするはずの非常に不思議な滑石油だろう、しかし、私からかなり愛らしいと思われているのであれば、それも簡単に諦められるだろう、と彼女は続けました。真実の愛のこれらの甘美で高潔な表現がどれほど私の心を打ったか、親愛なるティラントよ、あなたなら容易に想像がおできになりましょう。そして、涙をおさえるためになんらかの手だてが打てたかどうか。私はその瞬間美しい主人の足元に倒れこみ、彼女の足を涙で濡らし抱き締めました。しかし彼女はまもなく私を立ち上がらせ、私を力いっぱい抱き締めました。そして私たちは長いあいだ顔を二人の涙で濡らしたまま立ちつくしていたのです。お気に入りの侍女が洞窟に戻ってくると、二人は離れなければなりません。そんな状態でいたことが知られないように、私たちは泉のそばの暗がりの中にひっこみました。主人は私の顔に水をかけて遊んでいるふりをしましたが、それは、私が泣いていたことを彼女の腹心に悟られないようにするためでした。

(以下次号)

〔註〕

- (1) Honoré d'Urfé (1568 – 1625)の小説。5巻のうち最初の3巻はデュルフェ自身の手で刊行された(1607 – 1610 – 1619)。4巻は彼の秘書のBalthazar Baroが刊行(1627)。5巻はこのバロが1628年に書き加えたものらしい。羊飼いの男女、CéladonとAstréeの恋の物語。この小説が17世紀の文芸に与えた影響は多大だった。ことに感情の細やかな分析を促し、プレシオジテを発生させた。
- (2) エキュ金貨。聖王ルイ9世によって初めて鑄造され、1640年まで使用された。
- (3) 17世紀の初頭にドイツで結成され、そのち近隣諸国に広まった秘密結社。
- (4) ジェームス一世時代に鑄造された英国の金貨。
- (5) 11世紀から行われた球技で、テニスの原型とされる。